《解説》

森　晋太郎

『親愛なるカワバタ様』（原題 ʿAzīzī al-sayyid Kawābātā）はレバノンの作家ラシード・ダイーフ（Rashīd al-Ḍaʿīf）が一九九五年に発表した六作目の小説である。初版は Dār Mukhtārāt, Beirut から刊行されたが、今回の翻訳では二〇〇一年に Riad El-Rayyes Books, Beirut から刊行された第二版に依拠した。

この作品は語り手＝主人公の「ラシード」が半生を回想しながら、日本の作家である川端康成に語りかける形式をとっている。レバノン北部の山岳地方に生まれたマロン派キリスト教徒のラシードが回顧する半生は、伝統と近代の相克に彩られている。村の学校で地動説を習ったときの衝撃。六〇年代から七〇年代にかけてのマルクス主義への傾倒…。父親や母親や旧世代の大人たちと衝突しながら、主人公は「科学的真理」に魅せられてゆき、共産党員としてレバノン内戦に参加する。しかしラシードはやがて、宗派主義的で暴力的な内戦の現実を思い知らされ、ある日ついに砲弾の破片を体に浴びて瀕死の重傷を負い、死線をさまように到る。

このように深刻な話が断片的なエピソードの積み重ねによって、脱線を繰り返しつつ饒舌に、何とも言えないおかしみを湛えて語られる。自分で自分の物言いを茶化してしまう自己言及のスタイルは、絶対的な「真理」の信仰をもって破壊的な内戦に関与してしまった挫折の経験と苦い自己批判という主題を取り扱うにあたって、効果を発揮しているように思う。

川端康成を語りの受け手に選んだ理由として作者ダイーフは、一つには川端が「大義や特定の目的のためにでなく自殺した」ということを挙げている。アラブ世界で祖国や大義や宗教のために「殉難」する行為が美化され、内戦の中で「信じがたい殉難者のインフレ」が生じているという実感を覚えたダイーフは、「無というものに惹きつけられた」川端の死に共感したのだという。

また、川端がアラブ人でも西洋人でもなく、イスラーム教徒でもキリスト教徒でもない日本人であり、もはや口を開くことのない故人であるということも重要な理由として挙げている。アラビア語で書かれたこの作品の想定される読者は第一義的にはレバノン人やアラブ人なのだけれども、事情を知らない中立的な部外者で「話を聞く用意のある」相手に語り聞かせる体裁をとることで、直接に関わりのある者とは異なる距離感を持ちながら自己批判を行うことが可能になっている。そんな作品を日本語に訳して読んでみると、何やら不思議な気分にとらわれる。

レバノン山地の村の生活描写のうちに語られる父親や母親とのエピソード、デモに参加するため同級生らと共に出かけた首都ベイルートでの冒険譚など、今回は割愛せざるを得なかった魅力的な場面も数多いので、機会があればぜひ紹介してみたい。ここでは全体の三分の一ほどを抜粋して訳出した。作者の持ち味であるユーモラスな語り口を多少なりとも味わっていただけたらと思う。抄訳を承諾してくださった親愛なるラシード・ダイーフ様。どうもありがとうございました。